

開拓の 原点を見る



〈左〉モデルバーン 〈右〉モデルバーン2階に収蔵される農器具

私と遺産

旧来の技術、きちんと残す

第2農場の建物内には、北海道開拓の父ケブロン米農務長官が1871年に持ち込んだりーパー（麦刈り取り機）など10点あまりを含め、約300点以上の農具を収蔵している。農具の調査や管理にあたってきた北大の端俊一教授（農業機械学）は「札幌農学校当時を思い起こさせる。敬意を払っている」と愛着を持つ一人だ。端教授自身も北大農学部を1967年に卒業した。まだ第2農場が利用されていた大学4年の時に、種牛舎で数日間、行った牧草の乾燥実験が思い出として残っている。卒業後は4年間の帯広畜産大助手を経て、助手として母校に戻ってきた。

100周年（1976年）に際しては、図書館に保管されているクラーク博士らが開拓使出した手紙を手がかりに農具の由来をたどった。「輸入された農具は当時の日本の経済水準からすると、高額。開拓使が農学校に力を入れていたと感じた」と言う。

第2農場の一般公開に関する専門委員会委員長を4月から務めており、「新しいものに目が行きがちだが、今まで培われた技術をきちんと残していくことが大切。研究者にもぜひ活用してほしい」と期待を寄せている。